

島田正治

松村達雄さんに少しずつ仕事ができるようになった。それはテレビだった。「こわい水」について、石川達三原作の「四十八歳の抵抗」これはあるサラリーマンの物語でその主役を演じた。ちょうど松村さんの年令ぐらいで、よけいひきつけるものがあった。

いつか銀座で、この折も杉谷さんと一緒だったが、松村さんと会ったことがある。その日は映画監督の黒沢明に会って映画の出演の依頼を受けたというのであった。黒沢さんはすでに約束の喫茶店で待っていて、松村さんがドア - をあけて入ってくるのを、それを待っていましたとばかりに自分が素早く立ってドア - をあけ「松村さんですね」といって迎えてくれたという。「さすが世界の黒沢さんだ。腰がひくい。」その感動ぶりはただならぬものがあった。その映画は「どですかでん」だった。

テレビコマーシャルもあった。これはカメラ会社のもので視聴者に向けて、ただ「コニカはコニカ、いいと思うよ」といい片手に持ったカメラを前にさし出すだけのもの、押しつけがましい宣伝の多い中、松村さんがいわゆる松村節で語りかけてくるところがよくユーモアもあって大いにうけた。折りから声帯模写で人気のあった桜井長一郎が舞台上で松村さんのまねをしたことがあったが、あまりお客にうけないようだった。

長女が幼稚園へ通っている折、父母の会の会長をしたことがあった。何か文化的な催しをしたいと考え企画、一年間に隔月ごとに六回その会を持った。そのひとつに松村達雄さんに講演をおねがいをした。演題は「こどもと演劇」で芝居というのはひとりではできず、必ず相手が必要となるので、せりふ、動作、会話のやりとり、人と人との交り、そういうものがこどもの成長期に役立つのではないかと話された。後半は気軽なトークとなったが、その頃、松村さんが所属していた芥川比呂志主催劇団「雲」の客員でその時演じた「どん底」のせりふが本一冊分あって、よくこれだけのものが覚えられると感心、最初から最後まで出放しであった。「よく覚えられますね」と質問した。そうすると、「その答えは、女優の杉村春子さんがいいことを言っています。それは”幕があくからです”と。つまり、覚えねばならぬから覚えるのです。」

その頃、松村さんのエッセイ集「金はなくとも」と「のんびりゆこうよ」の本が出版された。文章力には定評がある。読書家でもあった。幼稚園での講演に謝礼として一万円を用意してさしあげると「これはいいですね、こどもも幼稚園でお世話になりました。これでこどもたちに本でも買ってあげてください」ということになり、これは「松村文庫」と名づけられて幼稚園に寄贈された。

黒沢映画、最晩年の内田百閒原作の「まあだだよ」に出演、これもせりふの多い役柄で、これだけのものをよく覚えられたと驚いた。気むずかしい監督によくこたえたと思う。寅さんシリーズでもそうだったが、松村さん自身も喜劇が最後のめざすものだと話していた。

いつのころだったか、今わたしの住んでいる川崎のマンションの下の商店街でばったり松村さんと会ったことがある。なんでも家を修復中で仮住いで駅前のマンションを借りているとのこと、持っている本の重みで家が傾きはじめたそう。島田さんがこのあたりに住んでいるのではとその散歩の途中に出くわしたわけだ。家へ寄って行ってくださいとたのんで上へあがってもらった。かれこれ二、三時間話して帰られた。

松村さんは絵が好きで、よく個展にもきてくださり、わたしの絵を買っていただいたこともある。家へ訪ねると玄関に飾ってあった。狛江に新築の家が建ち、ある建築会社の宣伝のちらしに居間が紹介されて、その壁にわたしの絵が飾ってあるのが目についた。その家へはまだ訪問していない。(つづく)